当代外语研究论丛
FOREIGN LANGUAGES STUDIES
外国文学研究系列

夏目漱石的『明暗』和当时的汉诗

（日文版）

夏目漱石の『明暗』とその時の漢詩

胡兴荣◎著

上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

（日文版）

夏目漱石的『明暗』和当时的汉诗

夏目漱石の『明暗』とその時の漢詩

胡兴荣◎著

上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

RFID

内容提要

本书分四部分阐述了夏目漱石的《明暗》与其《明暗》时期汉诗的关系。第一部分分析了《明暗》(1—88 回)的主要内容,说明了作者在《明暗》执笔途中开始作汉诗的要因;第二部分根据相关资料推算出了《明暗》章回的执笔时间;第三部分对《明暗》的章回与对应的 75 首汉诗一一作了较为详细的对比、分析研究,阐明了《明暗》与汉诗的关联性,凸显了漱石晚年"则天去私"的文学事实和本质内涵;第四部分基于本研究结合先行主要论考对"则天去私"作了评述,认为"则天去私"是漱石晚年所追求的文学和人生理想,漱石在去世前并未到达圣贤的境地,也决非庸俗之人,而是在追求"则天去私"境界的路上倒下的。

希望本书能为漱石研究者、漱石文学爱好者理解《明暗》和当时的汉诗及"则天去私"在方法或思考上提供一点点参考。

图书在版编目(CIP)数据

夏目漱石的《明暗》和当时的汉诗:日文版 / 胡兴荣著. —上海:上海交通大学出版社,2016

ISBN 978-7-313-15710-2

Ⅰ.①夏… Ⅱ.①胡… Ⅲ.①夏目漱石(1867-1916)—文学研究—日文 Ⅳ.①I313.064

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2016) 第 196557 号

夏目漱石的《明暗》和当时的汉诗(日文版)

著　　者:胡兴荣
出版发行:上海交通大学出版社　　地　　址:上海市番禺路 951 号
邮政编码:200030　　电　　话:021-64071208
出 版 人:韩建民
印　　刷:常熟市梅李印刷有限公司　　经　　销:全国新华书店
开　　本:710mm×1000mm　1/16　　印　　张:14.75
字　　数:340 千字
版　　次:2016 年 9 月第 1 版　　印　　次:2016 年 9 月第 1 次印刷
书　　号:ISBN 978-7-313-15710-2/I
定　　价:48.00 元

版权所有　侵权必究
告 读 者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系
联系电话:0512-52661481

序

夏目漱石(1867～1916)といえば、一般的に小説家・英文学者としてよく知られているが、実際の漱石は俳句・漢詩・書画もよくした。1990年代に岩波書店によって出版された最新版の『漱石全集』には、俳句2500句、漢詩208首が収録されている。漱石自身がその自作の『文学論』「序」に「余は英語に於ける知識は無論深しと言ふ可からざるも、漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず」といったように、彼は英文学者と同時に漢学者でもあった。漱石は森鴎外とともに日本近代文学の巨匠と言われている。それは彼らが日本人として漢学を含む東洋、西洋にわたる博学や文学その他に残した業績が多いことのほかに、倫理的な特質が後世文学に与えた貢献も大きいことからであろう。言うまでもなくその倫理的な根源は漢学の素養による儒教に由来する。江戸時代における漢学隆盛の恩恵で明治時代の日本の文化人はだいたいにおいて漢学の素養が高かった。漱石は幼い時から漢学が好きで、少年時代には漢学私塾の二松學舍(現二松學舍大学)で漢学をもっぱらに学んだこともあり、「左国史漢」や漢詩などの漢詩文に馴染んだ。それで彼の後の小説で見られる儒教的な倫理観、東洋的美意識や江戸的感性が磨かれていたと言われている。漱石はもともと、文学を志したが、兄のアドバイスを受け、「立身出世」もあって、時代の潮流に応じ、大学で英語を専攻としたという。漱石と英語との関わりは彼の大学入学から朝日新聞社入社までの二十年間近くにもあったが、しかし、それが実際に彼の文学に与えた影響は、おもに彼の英国留学の集大成とした『文学論』で示された知的素養や創作方法で、文学の主題や倫理観はやはり東洋的なものである。これは漢学が彼の精神世界の形成に大きな影響を与えたことを意味する。漱石は少年時代から漢詩文を自ら作って楽しんできた。英語を本業とした十年間くらいの間を除いて大体において漢詩の詩作を続けて断たなかった。とくに「修善寺の大患」後、年を取るにつれて漢詩に親しむようになった。未完の『明暗』期では三ヶ月ぐらいで75首にも上る漢詩を残してくれた。『明暗』執筆の途中、詩作を始めた動機はこの時、彼が弟子の芥川龍之介ら宛書簡に漏らしたように、長い間小説『明暗』を書き続けて「俗了された気持になります」から、漢詩の詩作を通して俗了された気持を清らかにしようという狙いがあった。つまり漢詩は漱石において小説の俗な世界に対して雅の世界で、精神浄化的な機能を持っていたものに違いない。

漱石は当時日本文壇の主流となった自然主義とは別に、前期の余裕的,徘徊的な小説「吾輩は猫である」「草枕」、正義感が溢れた「坊っちゃん」を書き、中期に恋愛三部作といわれた「三四郎」「それから」「門」、「行人」「彼岸過迄」「こころ」を書き続け、晩年では人生観照、内省的な「道草」「明暗」を書いて、心理的手法

で近代人の孤独やエゴイズムを追求しつつ、「則天去私」の境地を希求した。漱石は『明暗』執筆中、病気で倒れる前のその月の上旬あたりに「則天去私」という彼の人生及び文学についての理想的な課題を口にした、と伝えられている。「則天去私」の四字は漱石自身の造語で、それは自我の超克を自然の道理に従って生きることに求めようとしたものと知られている。漱石理解の大きな課題として「則天去私」は漱石死後から長い間よく研究された。今まで蓄積した多彩な論説にもっとも体表的なものを挙げれば、小宮豊隆の神聖化説と江藤淳の神話論を数える。ところが、二十世紀の末ごろに時代の流れのもとに「則天去私」の研究は下火となった。それ以降の状況は石原千秋がその『漱石の記号学』に断言したように、文学を持ってゲームに楽しむ今の世に「則天去私」なんかを研究する人はどこにもいないようである。実際、「則天去私」は漱石の課題とともに、われわれの課題でもある、おそらく生を営む人間として時空を超越して考える永久の課題だろうと思う。それが時代に逆行して本稿を着手したきっかけでもあった。

「則天去私」は漱石が『明暗』を執筆する時期に提出した課題だから、それを考えるには、『明暗』を考えなければならない、というのはほとんどの漱石研究者の共通認識であろう。しかし、『明暗』は未完の作品なので、『明暗』を以て「則天去私」を考えるには難しい難関にぶつかるのも当然である。そこで『明暗』期の漱石の漢詩をも考える必要性が生じたのである。というよりも、漱石は『明暗』期に多くの漢詩が重なった結果、東洋的な「則天去私」という思想を口にするのも当然であろう。また漱石の『明暗』時代の漢詩は当時ほとんど公表していなかったので、ある意味でいえば、『明暗』執筆期における作者の日記のような性質を持っていると言ってもよい。これらの漢詩を対応する『明暗』の章回と比較・分析すれば、その時漱石の心境を窺うことができると思われるわけで、『明暗』とその時期の漢詩を関連して「則天去私」を考えるほうが一つの妥当な方法であろう。しかし、漱石の漢詩は比較的にあまり重視されてこなかったことも事実である。その原因に日本近代の西洋化によって漢学軽視の時勢もある。もちろん、今まで『明暗』期の漢詩と『明暗』との比較研究も少なくない。しかし、漢詩と小説の学問分野の違うことなのか、或いは『明暗』期漢詩のすべてを『明暗』章回と比較する研究はあまりにも面倒な作業と思われたのだろうか、とにかく今はそのあたりのもっと具体的で詳細な研究は見られていないようである。それで本稿は『明暗』とその時期の漢詩を詳細に比較・分析するのである。『明暗』期漢詩のすべては作者が作詩の日付けを付けている、それらと『明暗』ともっと具体的で詳細な比較・分析を行なうには、『明暗』章回の執筆時間を明らかにする必要がある、それで本稿はまず関する資料を踏まえて『明暗』章回の執筆した時間を明らかにする。それに漢詩が作られた前の『明暗』を『明暗』の前半として読みながら、作者が漢詩の詩作を始める要因を考える。それから漢詩を作り始めた『明暗』の後半の各章回をそれに対応する漢詩の75首と一々に比較、研究する。このような作業によって漢詩と『明暗』との関連性を検証し、「則天去私」の文学的な事実を浮き彫りにして、その内実を吟味した上で、その時の漱石の心境を検討するのである。最後に「則天去私」を先行諸論考に触れながら、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

自分なりに考える。また、このような作業によって、『明暗』、そしてその時期の漢詩、さらに「則天去私」に対する理解をよりいっそう深めることができるような予覚もするのである。

目　次

第一章　『明暗』章回の執筆時間 …… 1

第二章　漢詩が作られる前の『明暗』 …… 6

一、「自然」と「人間」 …… 7

二、津田の「帰省」 …… 15

三、お延の「芝居見物」 …… 23

四、お延の「里帰り」 …… 28

五、「天の目的」をめぐって …… 44

第三章　『明暗』とその時期の漢詩との比較 …… 53

一、「兄妹喧嘩」の火花——「道到無心天自合」 …… 53

二、「夫婦和合」の「微笑」——「陰陽黙照是霊威」 …… 87

三、「愛と虚偽」の「明暗」——「曾見人間今見天」 …… 91

四、私欲に蠢く「世間」——「人間有道挺身之」 …… 100

五、「小姑」と肉薄するお延——「午院曝書黄雀暄」 …… 115

六、相互利用の「謀計」——「虚空歴歴現賢愚」 …… 128

七、津田夫婦の「妥協」——「会天行道是吾禅」 …… 145

八、主客転倒をする人——「怙恃両亡立広衢」 …… 165

九、「自惚れ」の津田——「大愚難到志難成」 …… 186

十、あわれむ「寒菊」——「空中独唱白雲吟」 …… 205

第四章　『明暗』とその時期の漢詩と「則天去私」 …… 211

一、『明暗』とその時期の漢詩 …… 211

二、則天去私 …… 215

『明暗』原稿（章回）を執筆した日付と漢詩との関係 …… 222

主要参考文献 …… 223

谢辞 …… 226

第一章　『明暗』章回の執筆時間

大正5(1916)年5月26日、『明暗』が『朝日新聞』(東京5.26～12.14、大阪5.25～12.26)に連載された。主人公の津田由雄と妻のお延の不安定な家庭生活を中心に、人間のエゴイズムを鋭く追求した作品である。この作品は同年、5月18日*(推定附表)から一日に一回ずつの予定で書かれたが、作者の死によって同年11月21日に未完のままで中絶された。故にこの作品のテーマ、ことにその間作者が提出した大きな課題としての「則天去私」についての論考はどうしても推測的、恣意的になるのが避けられなかった。作者は『明暗』(全188章)の半分くらいまで進行したときから、ほとんど日課のように、午前に小説『明暗』を書き続け、午後は大体において一日に一首ずつのわりで漢詩を作った。この間で作られたこれらの漢詩は『明暗』との関連性があると考えられる。小説『明暗』と、これらの漢詩との比較を通して、そのときの漱石の心境を窺うことができると思って、『明暗』を前半部と後半部に分けて考えて見たい。この作業を行なう前にまずは『明暗』章回の執筆した時間を明らかにしておこう。

『明暗』各章回を執筆した時間は今までの文献ではある章回によって触れているだけで、すべての章回に関しては明確なものは未だにない。それで『明暗』章回を対応する漢詩との比較・分析する前に、まず関する資料を踏まえて『明暗』章回を執筆した時間を推敲する。最初に漱石を系統的に研究した一人は先に触れた漱石門下としての小宮豊隆である。小宮は『明暗』の第一回を一筆した時間をめぐってこのように言っている。「漱石が『明暗』を書き始めた日が、二十日であるか、それとも十九日であるか、その正確な所は是だけの材料では推定する由もない。ともかく『明暗』が新聞に載り始めたのは、五月二十六日からの事である」(『夏目漱石』岩波書店　1938(昭和13)年10月第三刷発行851頁)。『明暗』の最終回(188)について小宮はその『漱石の芸術』に次のように推測している。「もつと凄愴な感じに襲われたのは、漱石の死後、漱石が日々それに凭つて『明暗』を書いてゐた紫檀の卓の上に、いつもの通り真ん中にキチンと原稿紙が積み重ねてあつて、その一番上の原稿紙の右の肩に、小さく189と、漱石の手蹟で書いてあるのを発見した時であつた。是は恐らく十一月二十一日漱石が『明暗』の第百八十八回を書いてしまつたあと、明日書くのは第百八十九回であるといふ事を忘れない為に、此所に書きつけて置いたものに違いないのである。然しその翌日の十一月二十二日には、漱石は、胃部の不安と苦痛との為に、その189と心覚えに書きつけた原稿紙の上に突つ伏したまま、一字一行も書く事が出来ず、午後には到頭床をとつてもらつて寝込んでしまはなければならなかつた。」(『漱石の芸術』岩波書店1942(昭和17)年12月284頁)。つまり、小宮では『明暗』の188回が11月21日に執筆されたことはほぼ確定できるが、起稿の第一回の時間

については19日か、20日か確定できないと見ている。伊藤整も「『明暗』は漱石が死の床につく前日迄書き続けられたのであるが、惜しくも未完となった。大正五年十一月二十一日の朝、『明暗』の第一八八回を書いて、原稿紙の右頭に、次の回数のメモに一八九の数字を書き入れた漱石は、間もなく胃の痛みに堪えかねて、机に附伏になった。」(伊藤整「夏目漱石の生涯」『夏目漱石研究作家研究叢書』新潮社　1958(昭和33)年6月22頁)とほぼ小宮と同じこと言っている。また、近代文学研究者としてしられた猪野謙二も「漱石は大正五年五月二十六日から『明暗』を連載し始め、死病の床に就く前日の十一月二十一日の午前中までこれに没頭していた」(「『明暗』における漱石—虚無よりの創造—」『漱石作品論集成第十二巻明暗』桜風社1991年11月45頁、「思潮」8号1984年3月『明治の作品』岩波書店1966年11月)という。以上、三家は『明暗』始終回以外の章回の執筆した時間に関しては言っていない。『明暗』の起稿時間と最終回の時間のほかに、唐木順三は『明暗』期漢詩を作り始めた8月14日に対応する『明暗』執筆時間に着目し、「八月十四日頃は、大体九十回目にあたりを書いてゐたであろう」というふうに推測している(『明暗』論「明治大正文学研究」八号1952年10月81頁、『夏目漱石』国際日本研究所1966年8月)。また、荒正人は新聞連載小説の特性で原稿の執筆から、投函、製版にまでの過程を考えて、『明暗』の「大正五年五月二十六日、『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』(大正五年五月二十五日〈夕刊〉に発表された第一回分)を執筆した時間を指摘した。それによると、「この一部分は、五月十八日(推定)の午前中に書き始められたものである」ということになる(『明暗』解説、『漱石作品論集成第十二巻「明暗」』桜風社162頁、『漱石文学全集』9巻集英社1972年12月、『荒正人著作集5巻』三一書房1984年10頁)。そのほかに、吉川幸次郎は『明暗』期の漢詩を注釈する目で『明暗』の執筆時間を考えて、8月21日付、漱石が芥川ら宛書簡に「百回近くもあんな事を書いている」と言及した「百回近く」は、「小説は、その九十何回か、津田とその妹お秀の会話が、病院の二階で火花を散らしつつあるあたりである。この第一首が作られた八月十四日には、更にさかのぼって、津田の妻お延が、夫のいない二階で、夫の秘密をさぐり出そうとするあたりを、執筆していたと推定される」という。吉川は、8月21日は『明暗』の九十何回にあたるか明確に言っていないが、8月14日に、書いた「夫のいない二階で、夫の秘密をさぐり出そうとするあたり」は『明暗』の89回にあたると具体的に指摘している(『漱石詩注』岩波書店1967(昭和42)年5月。岩波文庫2002年10月181頁)。漱石の妻である「鏡子夫人の語るところによると、彼は「真蹤寂寞」の最後の詩を得た翌々十一月二十二日の夜、気分がよくないとてくるしそうに書き物机に附つ伏していたが、(略)」(『漱石の漢詩』松岡譲　朝日新聞社1966(昭和41)年9月167頁)、「189と小説の回数を書いた原稿紙に打つ伏せになって、一枚も書いておりません」(夏目鏡子『漱石の思い出』角川文庫昭和41年3月初版、昭和54年5月改版362頁)、それより漱石は二度と起きたことができなかった。最後の漢詩を作った11月20日の「翌々十一月二十二日」は『明暗』を書いていないから、最終回の188回を書いた日は11月21日になるはずである。

なお『大阪』(「朝日新聞」)では最終回(十二月二十六日)の本文のあとに、次のような記事が附している。

漱石氏が此の第百八十八回を執筆したのは先月十五日で、翌日から持病の胃が痛み出した。それで五六日静養するから書けないと云ふ知らせがあった、病状を問へば大した事はない、五六日後には必と書き続けると云ふことであつたが、二十二三日頃から急に悪くなつて、遂に思いがけなくも之が最後となつて了つた。(略)」(『漱石全集第十一巻』「後記(第十一巻について)」岩波書店1994年11月762頁)

単行本『明暗』の初版は、大正六年一月二十六日、岩波書店から発行された。(略)連載の第一回に相当する「一」のあとに本文が始まっている。

本文が終了した後に、小活字で次のような文章が組まれている。

附言、作者は此章を大正五年十一月二十一日の午前中に書き終つたが、其翌日から発病して、十二月九日終に逝く。斯くして此作は永遠に未完のまゝ残つたのである。(略)

なお、口絵の原稿写真の説明文「『明暗』第百八十八回[最後]の原稿のうちの頁と最後の頁となり大正五年十一月廿一[臥床の前日]午前中の執筆にかゝる」を印刷した一葉が挿入されている。(同上763頁)

以上の諸説や推測などで『明暗』章回の執筆時間を比較的に明確したのは、第一回は5月18日(荒)、第89回は8月14日(吉川)、第188回は『大阪朝日新聞』を除いてすべてが11月21日(小宮他)になっている。

漱石の年表でもっとも詳しいものといえば、荒正人の『増補改定漱石研究年表』を思い出せるが、其の中に『明暗』章回の執筆時間を明確に記されているところは次のようである。

五月十九日<金>か二十日<土>から『明暗』を起稿する。七時頃起床、午前十時か十一頃まで執筆する。」(『増補改定漱石研究年表』集英社1984(昭和59)年6月841頁)

六月十日(土)(中略)『明暗』二十四回分を東京朝日新聞社に送る。」(同上844頁)

九月二十五日(月)、山本松之助(笑月)宛手紙に、『明暗』百三十回の最後の原稿訂正したいので返送してほしいと伝える。」(同上851頁)

十一月十四日(火)、『明暗』(百八十一回、十二月七日(木)掲載のもの)を山本松之助(笑月)に送る。(封筒の表に「原稿明暗百八十一」と書いてある)」(同上856頁)

十一月二十一(火)、午前中『明暗』百八十八回書き終え、次の原稿用紙の右肩に189と書く。(百七十回でオノト万年筆のペン先折れる)」(同上858頁)

この先の『明暗』解説をも加えて、荒正人では、一回は5月18、19、20日のいずれか。24回は6月10日、130回は9月25日、181回は11月14日、188回は11月21になっている。

以上いずれの説や推測もおそらく漱石の書簡によったものと思う。しかし、もっとも決め手になるのはやはり漱石の書簡であろう。次は漱石の書簡から『明暗』章回に関する資料である。

拝啓 今日さき程投函いたしました明暗(二十四)の一番仕舞に「其小路を行き尽くして突き当りにある藤井の門を潜つた時、彼は突然彼の一間ばかり前に起る砲声を聞いた」(略)」(六月十日山本笑月宛書簡『漱石全集第二十四巻』岩波書店1997年2月563頁)

拝啓昨日御送り致しました明暗百三十回の最後の一頁(十一頁?)一寸訂正の必要有之候故乍御面倒御返送願上候(略)」(九月二十五日山本笑月宛書簡 同上573頁)

十一月十一日(土)山本笑月 消印午後1－2時

京橋区滝山町四朝日新聞 山本松之助様 原稿(明暗百七十八)

十一月十一日 牛込早稲田南町七 夏目金之助 [封筒のみ](同上587頁)

以上の漱石の書簡で分かるように、24回は6月10日、130回は9月25日、178回は11月11日になる。『明暗』は計画によって書き、投函、そして製版、印刷、刊行という手順になっているから、午前中に完成したものを当日に投函するはずである。もしこの仮説が成立とすれば、以上三回は確定できる。だだし、荒正人の方は181回は11月14日があるが、漱石の書簡にはそれがない。代わりに漱石の方に178回は11月11日がありが、荒の「年表」にはそれがない。この場合は漱石の書簡を基にし、荒のを参考した方が妥当であろう。

また、1990年代出版された岩波書店『漱石全集』(第二十七巻1997年12月)の最新版の年譜では次のようになっている。

5月18日頃 新しい連載小説『明暗』を起稿した。以降十一月二十一日に一八八回で中絶するまで、毎日一回分を執筆しては、一回ずつ東京朝日新聞に送った。(書簡2315、2422、2462など推定)

6月10日 『明暗』第二十四回を執筆、郵送した。(五月十八日から二十四日目)(書簡2422)

8月14日 七言律詩(漢詩134)を作った。以降十月二十二日までの七十日間にわたり連日のように七言律詩を主とする漢詩を(計七十首)を製作した。(漢詩134－203)

9月24日(日)『明暗』第一三〇回を執筆、郵送した。(五月十八日から一三〇日目(書簡2462)

11月21日 『明暗』第百八十八回を執筆。この回が絶筆となった。(小宮)

11月22日 胃潰瘍が再発、『明暗』執筆のため机に向うが一字をも書くことが出来なかった。以降、主治医として真鍋嘉一郎を希望し、その治療を受けた(小宮)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

これも漱石の書簡を基にしたものだが、いちおう最近のものとして受け止めたい。以上の推測などを確かめる文献資料として高木文雄の研究を挙げよう。高木は『明暗』期漢詩に「柳の出ているのは九首十句で、その内容と『明暗』の柳との間には微妙な関係が見出せる。『明暗』は1916: 大正五年六月十日から十一月二十一日までの間は、毎日確実に一章ずつ執筆されているから、八月十四日には第八十九章が書かれたことになる。」という(高木文雄「柳のある風景—『明暗』の方法—」『漱石作品論集成第十二巻』「明暗」桜風社219頁、次の附表同218頁)。*注( )は筆者。

月日	詩句(漢詩番号)	執筆章	関係・類似
八・一四	柳外帰牛帯夕陽(134)*	八十九	三番目の柳の当日、夕景
十五	風吹弱柳枝枝動(135)	九十	三番目の柳の翌日
二九	人到渡頭垂柳尽(149)	百四	
三〇	柳色糢糊不厭風(149)	百五	
九・九	翠柳長吹精舎縁(159)	百十五	四番目の柳の翌日風
十九	不令柳暗入疎廉(169)	百二十五	五番目の柳の二日後門前
一〇・一〇	点春成仏江梅柳(188)	百四十六	六番目の柳の三日後並木
十八	紅花柳緑前縁尽(194)	百五十四	七番目の柳の前日
十九	門前高柳接花郊(195)	百五十五	七番目の柳の当日
	花飛柳散対空梢(195)		

上の表は、柳を仲立ちとして示された『明暗』と漢詩との関係だが、そこに少なくとも『明暗』134回の執筆時間が確かめることができるといえよう。

以上のように、『明暗』の最終回(188)を執筆した日付は『大阪』の記事(十一月十五日)の外、すべてが十一月二十一日になっていることは上に上げた資料を踏まえて分析したとおりである。漱石は十一月十九日と二十日でも漢詩を作っていたから、『明暗』を書き続けるはずである。もし『明暗』の188回が11月21日に書かれたものと考えてもよいとすれば、また漱石が午前中書いた原稿を当日投函するとすれば、『明暗』の24回は6月10日、130回は9月24日、178回は11月11日に書いたものと考えられる。まずこれらの章回を大正五年のカレンダーに入れて、それから残ったの章回も日付順に埋めれば、『明暗』の各章の執筆の時間も分かってくる(詳細は後附表)。これによって『明暗』の執筆中、始めの漢詩を作った8月14日は『明暗』の八十九章に当る。それで吉川幸次郎と高木文雄の推定にもあてはまるから、『明暗』起稿は大正五年5月18日であることは確定できたのである。これによって次は、この89回を境として小説『明暗』を前半と後半に分けて読んでいく。以下、前半はつまり漢詩が作られる前の『明暗』で、後半すなわち漢詩を作り始めた時からの『明暗』のことである。そして前半を読みながら、漢詩を作り始める要因を考え、後半は漢詩との比較、吟味で漢詩と『明暗』との関連性、漱石が俗了されたかどうか、または浄化されたかどうかも検討して、その時の漱石の心境を窺うのである。

第二章　漢詩が作られる前の『明暗』

推定によって、漱石が『明暗』時代の漢詩を作り始めた8月14日は『明暗』の89回あたりに当たる。それで漢詩が作られた前の『明暗』は88回までとする。『明暗』の88回は小林の「失言」によって津田に何かがあることを感じたお延は小林の帰った後、「何時までもぶんやり其所に立つてゐた。それから急に二階の梯子段を駆け上がつて、津田の机の前に坐るや否や、其上に突ッ伏してわつと泣き出した」。89回からお延は津田の秘密の証拠を捜す行動に入る。それで津田夫婦の「明暗」は一層明確化になった。そして漢詩は89回から作り始まった。次は『明暗』第1回から第88回までの前半部を読みながら検討していく。

『明暗』の前半部はおもに津田夫婦の別々の帰省することを書いている。結婚してから半年が経って、津田夫婦は自分たちの愛に対して互に不満を感じ始める。ちょうどその時、津田の痔病が復発した。入院治療の為、二人が別々「里帰り」をした。津田とお延が自由恋愛で結婚した。お延にとって津田は一目惚れの男であった。彼女は始めて津田に会ってからすぐ彼を愛した。それからまもなく彼女は結婚の希望を養父母(叔父叔母)に告白した。叔父叔母は心の中にこの結婚を賛成しないにもかかわらず、お延本人の意見を尊重するため、お延の希望のとおりにこの結婚に応じた。お延は始めのうちはこの愛に満足した。津田のような男を見つかったのは有難く思った。そしてそれは自分の「千里眼」のお陰であるに違いないと信じきった。新婚の幸福が永遠に続くように信じきった彼女は、自分の愛を誇張的な意味で世間に見せびらかした。しかし、半年の間に、彼女の不満がだんだん増えてきた。自分が夫に捧げた愛とその回報を比べると、絶望するほど、夫が自分に対する愛を疑い始めたのである。ところが自分の「面目」を維持したい彼女は当然この婚姻における自分の失敗を否定しなければならなかった。彼女は自惚れるほど津田と結婚した当時の直感を信じ切っているし、自分の努力によって津田の愛を得ることができると確信を持っているのである。だから彼女は表に今までの言動を保ちながら、裏には自分の言動を裏切りつつある現実の苦渋を舐めなければならなかった。と同時に津田の心を引き戻す努力をし始めた。お延は聡明、怜悧な女に違いなかった。そしてその自己実現は直接的に他人に損なう事も何も加えなかった。彼女はただ「面目」を自分の命よりも大事にする自尊心の強過ぎた女である。適切に言えば、自己愛の強い女で、自己表現をし過ぎた女でもあった。そいうわけで吉田夫人やお秀などの標的になり、特に小林の「失言」によって津田に隠された秘密が表面化にされ、彼女をますます厳しい現実に追い込ませたのである。それで小林を送っていった後、彼女は「ぶんやり」しなければならなかった。そして「わつと泣き出した」のである。しかし現実的に窮地に追い込ませつつあるにもかかわら

ず、自分の過失を否定したくない彼女は、窮地からもがき出す自分の能力を信じ切った。何よりも津田の本心を知ることは彼女の急ぐべきことであった。

お延に対して津田はわりに自分を押し隠す男である。彼はお延と結婚したのは愛というよりもお延の社会的な関係で自分の「未来に間違いがない」という打算的な成分が多かった。彼はお延に会わなかった前に清子という女を愛した。その愛を信じきった彼はついにその愛に裏切られた。結婚しようとする直前、その女は「あつというまに」他の男と結婚してしまったのである。この「恋愛事件」に関して仲人とした吉川夫人は善し悪しの両義において大きな働きを果たした。そのためか彼とお延との結婚、いわゆる「第二の恋愛事件」の仲人も運命的に吉川夫人になった。夫人の夫、津田の上司である吉川は、お延の叔父の岡本の友人であると同時に、津田の父の友人でもある。父の委託を受けて津田の面倒を見るこの吉川は、津田の「監護人」にも当たる人であった。このような利害を交えた関係で、津田は心の中にはとにかく、表はお延を非常に可愛がっているように見せる。それで聡明、怜悧な津田は自分の運命を吉川夫人に委ねたようになったのである。その意味で言えば彼はお延と並んで自己愛の強い人である。津田は自分の価値を表すには、金力を以てする。彼は嘘ばかりをつく見栄坊である。しかし、女を操る面においても、処世においても、本質を現さないことに堪能する津田ではあるが、司馬昭の心、みな世間に知られている(「司馬昭之心世人皆知」)ようである。それで彼はだんだん窮地に追い込まれたのである。友人の小林の「失言」によって「明」に愛の見本と称する彼とお延の関係は「暗」に激しい「夫婦戦」の序幕を開き始める。彼は「明」に自分の秘密を否定しながら、「暗」にそれを辿り続けている。津田夫婦は自己表現においては「陰盛陽衰」の景観が呈している。しかし聡明、怜悧、自惚れ、技巧、旺盛な虚栄心、極端な自己愛においては運命的な一致があった。それらは彼ら夫婦を地獄に落す素質的な要素であった。詳しいことは『明暗』の前半部を読みながら考えてみよう。

一、「自然(しぜん)」と「人間(じんかん)」

津田は痔病を病んでいる。彼は医者に診断してもらった。医者の話によると、思ったよりは重いが、「結核性」ではないから、根本的な治療をすれば、本式に治るという。医者の診断に津田は疑問を持っていた。

「何うしてそれが分るんですか、ただの診断で分るんですか」
「ええ、診察た様子で分ります」
(『明暗』1回、以下『明暗』に関する引用は数字だけで示す)

850倍の顕微鏡も備えているこの病院は微小なものを拡大して観察できるから、病気の細部までを診断する医学力があった。「津田は自分の都合を善く考へてから日取りを極める事にして室外に出た。」込み合った電車の中に、彼は去年、病気が突発して手術を受けた当時の「烈しい疼痛」の記憶に襲われた。

「どうしてあんな苦しい目に会ったんだろう」

(略)何等の予告なしに突発した当時の疼痛に就いて、彼は全くの盲目漢であつた。其原因はあらゆる想像の外にあつた。不思議といふよりも寧ろ恐ろしかつた。

「此肉体はいつ何時どんな変に会はないとも限らない。それどころか、今現に何んな変が此肉体のうちに起こりつつあるかも知れない。さうして自分は全く知らずにゐる。怖ろしい事だ」

此所迄働らいて来た彼の頭はそこで留まる事が出来なかつた。どつと後から突き落すやうな勢で、彼を前の方に押しやつた。突然彼は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。さうして其変る所を己は見たのだ」

このように、「肉体」と「精神界」の異変が通じ合うようなことに気が付いた津田は、二三日前、友達から聞いたポアンカレー[注1]の「偶然」を思い出す。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だといふ、所謂偶然の出来事といふのは、ポアンカレーの説によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸見当が付かない時に云ふのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫の配合が必要で、其必要な配合が出来得るためには、またどんな条件が必要であつたかと考へて見ると、殆んど想像が付かないだろう」

(略)彼はそれをぴたりと自分の身の上に当て嵌めて考へた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするやうに思へた。しかも彼はついぞ今迄自分の行動について他から牽制を受けた覚がなかつた。為る事はみんな自分の力で為、言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた。

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだろう。それは自分で行こうと思つたから行つたに違ない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈ではなかつたのに。さうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだろう。それも己が貰はうと思つたからこそが結婚が成立したに違いない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思つてゐなかつたのに。偶然?ポアンカレーの所謂複雑の極致?何だか解らない」

彼は電車を降りて考えながら宅の方へ歩いて行つた。(2)

『明暗』はこのように始める。津田は知的な人間である。彼は自分の心身に起きた異変をポアンカレーの「偶然」の論理に応用して、人間を左右する「暗い不可思議な力」を発見したのである。津田において「肉体」の異変はいうまでもなく、彼の痔病であるが、精神界では端的にいうと、彼に起きた二回の「恋愛事情」である。ことに彼は第一の「恋愛事件」で「彼の女」に裏切られた。それで彼は再婚していながらも、その真相を尋ねたいと思いつつ、「彼の女」を忘れることができなかった。それが妻のお延に疑われ、彼の真相究明に乗り出すのであ

る。それで津田夫婦は明に夫婦和合を演じ、暗に夫婦戦争を行われて、新婚してまだ半年に過ぎない彼らの家を壊しつつある。それでも彼らは夫婦戦争を行ないながら、真相究明を続けて已まなかった。このように『明暗』は主に津田夫婦の真相究明の遍歴を書いた作品である。真相を究明することは大きな意味において真理を追究すること、また理想を追求することにつながっている。しかし「暗い不可思議な力」で覆われた」「ポアンカレーの所謂複雑の極致」の真相はその「原因があまりに複雑過ぎて一寸見当が付かない」。すると、真相不可知という命題が『明暗』の始めの二回で設定したのである。真相不可知という観念は『明暗』の作者の通念ともいえる。これは漱石の作品に、たとえ「Xなる人生」(「人生」)、「人間の研究上記憶して置くべきこと」(『三四郎』9の3)及び一連の「恋愛小説」に表れた人間不信の通念にも繋がっている。人間の「異変」は肉体と精神とに相通ずるところはあるが、肉体的な異変は主に具象に現れるから、医者の経験や科学医療技術によってその原因はある程度分るかも知れない。ところが、精神的な「異変」は表象に過ぎないから、その真相は分かりにくい。真相や原因が分からない以上、治療することは困難になるわけである。その上に人間は大体において表裏的なもので、そして生きている人間の心は常に移り変わるから、その真相を認識するのは難しいというよりもむしろ不可能に近い。作者はこう考えているようである。もっとも津田夫婦が問題にするのは人間の心理である。彼らの努力は報われるのだろうか。

『明暗』では、津田も、その妻のお延もともに真相を探っている。そしてその真相に病まれている。津田の痔病は手術を受けて治るかも知れないが、彼の精神的病気はいろいろな要素によってなされているから、もっと複雑である。これらの要素を分かるのは病気を治すことにかかわっている問題である。

お延は夫に愛嬌を振りまくには、意識的によく表情を動かし、嬌態を尽くして常に甘ったれるようなことをする、そして自分のもっとも得意なところをよく利用する女である。これが津田に与えた影響は必ずしもよいものではなかった。「ある時の彼は進んでそれに媚びようとした。ある時の彼は却つて反感的にそれから逃れたくなつた」。津田の心の底には「御前のやうな女」と思って、彼女を「見縊つた自覚がぼんやり働いてゐた」。一方、お延の嬌態に対して、津田は「一種の自信力として貯へて置きたかつた」。「粧飾としても身に着けて置きたかつた」。彼は実用のない洋書を読むように、「勉強家」ぶりを妻に見せた。さらに自分の身分を作るために妻に隠して「送金事件」のような嘘を吐いた。要するに、彼ら夫婦の和合には妻が愛嬌を振りまき、夫は学者や金持のようなふりして身を粧う、というのは彼らの観念である。

入院にあたってお延は妻たる関心を見せるはずであるが、しかし彼女はそれよりも芝居見物に心を奪われた。夫は入院のことに悩んでおり、妻は見物着を択ぶのに派手やかな色を見比べている。現実に父からの送金が来なかったことは津田にとってかなり大きな問題になっている。これは単なる目下の経済拮抗だけの問題ではなく、彼が今までお延に隠していた「送金事件」の嘘が曝け出されることを意味する。本来、父からの送金を必要とするのはお延の虚栄心より

も自分のそれを満足するための一種の格好付けであった。今までにお延に内証にしていたことがばれたら、お延の眼に彼及び彼の父がどのように映るかは彼の一番恐ろしいことである。だから彼は父の悪口を言っても、ただ送ってくれないだけで、金がないと言わない。彼はそれでお延が自分や自分の父を軽蔑することを恐れているのである。しかし、金が来なければ、面目よりも厳しい現実問題が彼を困らせる。月末の入用の上に入院費の出所がまだないのである。彼は岡本へ行って融通してもらうかとお延に頼んでみたが、お延にはっきりと断わられた。お延がこれを断ったのは岡本に金がないのではなく、夫に対して冷淡なためでもなく、同情心がないのでもなく、ただ自分たちに金のないことを知られたくないからである。普段、彼女が「世間」に吹聴したのは、金に困ることのないところに嫁に行ったという身分である。いま金を借りることになると、彼女の「面目」にかかわる問題なのである。その代わりに彼女は自分の晴着を質屋に持って行って金を借りることにする。それはまた「夫の衿り」にもかかっているから、今度は津田が断った。あれかこれか考慮する結果、方法はやはり京都の父から貰う外に仕方がないようである。このように金に関して夫婦とも極端な虚栄心を持つ人間である。現実を離れたこの面目のために、彼らはすべての面において嘘をつかなければならないのである。嘘をついて親のすねをかじるが、親の送金が来ないと、体面どころか、基本的な生活にも困る「今の若もの」である。

入院休暇のために会社で上司の吉川に会えなかった津田は退勤帰宅の途中、吉川の自宅へ寄ることにした。

彼としては時々吉川家の門を潜る必要があつた。それは、礼儀の為でもあつた、義理の為でもあつた、又利害の為でもあつた。最後には単なる虚栄心の為であつた。

「津田は吉川と特別の知り合ひである」

彼は時々斯ういふ事実を背中に背負つて見せたくなつた。それから其荷を背負つた儘みんなの前に立ちたくなつた。しかも自ら重んずるといつた風の彼の平生の態度を毫も崩さずに、此事実を背負つてゐたかつた。物をなるべく奥の方へ押し隠しながら、其押し隠してゐる所を、却つて他に見せたがるのと同じやうな心理作用の下に、彼は今吉川の玄関に立つた。さうして彼自身は飽く迄も用事のためにわざわざ此所へ来たものと自分を解釈してゐた。(10)

つまり、津田が吉川に近寄るのは主に名利を重んずるからである。彼は吉川の事務室から戻った途中、給使が「石段の下に寝てゐる毛の長い茶色の犬の方へ自分の手を長く出して、それを段上へ招き寄せる魔術の如くに口笛を鳴らしてゐた」。「犬を友達にしやうとして大いに骨を折つてゐる此給使」の所作は津田のような［趨炎附勢］（炎に趨り勢いに附く）的な人間を表すには大きな示唆がある。『孟子・離婁下』に「斉人有一妻一妾」[註2]という一節がある。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com